



みんなで途上国の現状について意見交換。「この授業でしかできない貴重な経験がたくさんできました」

## ガーナの子どもたちの 計算力アップを目指せ!

開発途上国の人々との交流を通じて、世界に目を向ける一。  
山梨県北杜市立甲陵高等学校では、  
ガーナの小学生を対象に計算力調査を行い、  
算数の学力向上を後押しするレポートを作り上げた。



ノートにいくつかの棒を書いて足し算をする女の子

「セントルシアでも日本のアニメが知られているんだって」  
「パプアニューギニアの民族衣装はカラフル!」  
「ジブチの小学校では理科の実験が人気らしいよ」  
南アルプス、八ヶ岳に囲まれた山梨県北杜市立甲陵高等学校の教室から、世界の国々について語り合う生徒の声が聞こえてきた。  
この授業は「高校生の国際貢献」。甲陵高校の総合的な学習の時間では、約15の授業の中から選択できる。「海外に興



### 大人が驚く 高校生の調査レポート

「高校生でも国際貢献できるということを知ってほしい」。3年前にこの授業を始めた佐藤吾朗先生は、そう力強く話す。青年海外協力隊OBの佐藤先生は、フィリピンで理科教師として活動。その後ガーナでも、JICAボランティアの支援業務に携わった。途上国で築いたネットワークを生かして、生徒にも世界に目を向けてもらえたら。生徒一人一人に活動中の協力隊員を紹介し、メールで交流する機会をつくっている。現地の生活、文化など、気になったことを隊員から直接聞ける経験は貴重。その驚きと発見を授業で共有している。

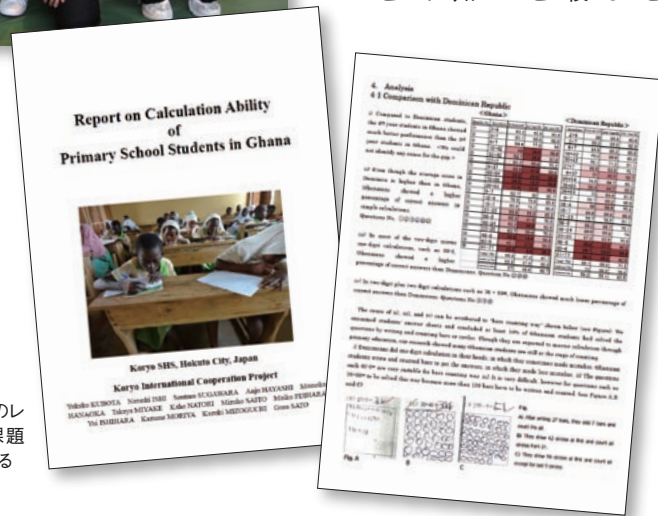


セントルシアの高校生3人とテレビ電話で交流したことも。お互いの文化や生活について紹介した

ある日の授業でのこと。「ガーナの小学生は算数が苦手」という話題になった。なんで苦手なんだろう。そんな疑問を抱いた生徒たち。自分たちでできることはないかとみんなで話し合い、ガーナの小学生にテストをすることに。現地の小学校で活動する隊員たちの協力の下、甲陵高校の「計算力調査」がスタートした。  
まずは、足し算と引き算がきちんとできるのかなど、基礎学力を調べることに。数の小さいものから大きいものまで、20問作って現地の隊員に送った。それを、4校の3年生と4年生、計237人に解いてもらったのだ。  
返ってきた解答を、みんなで丸付けしてみると…。  
27+7=36。バツ。「解答用紙に27本、7本の棒が書いてある。数え間違えたんだね」。  
60-6=66。バツ。「マイナスという記号の意味を理解していないのかな」。  
計算を間違えていたら、原因を探る。「単純に数を数えることはできて、それを応用することが苦手なようでした」と菅原庄太郎くん。「日本の小学生ならできるのに」と石井菜月さんも驚いた様子だ。  
丸付けが終わったら、今度は正答率を表にまとめる。正答率が特に低い問題に、課題が隠れているはず。結果は、二桁の筆算、繰り上げ、繰り下げ。これらを特に指導に力を入れるべきポイントとしてレポートにまとめ、現地の人も読めるよう、生徒たちが辞書を片手に英語に翻訳した。  
「本当に高校生が作ったの?」  
そんな声がレポートを受け取った隊員や現地の先生から上がった。地域の教育委員会にも届けられ、研修会の資料として使われることになった。  
「佐藤先生から、これは授業だけど、仕事だと思って真剣にやってほしいと言われて、責任感を持って取り組みました。今では、高校生でも途上国の役に立てる!と胸を張って言えます」と石原悠衣さんはほほ笑む。  
「受け身ではなく、自分からもっと知ろう、もっとできることをしようとしている生徒たちを頼もしく感じました」と



授業の取り組みをパネルで紹介。多くの来場者が足を止めて見ている



ガーナに送った計算力調査のレポート。誤答例などを載せ、課題が分かりやすくまとめられている

佐藤先生は話す。「海外にもっと興味があった」「将来は医者になって途上国で働きたい」など、生徒たち自身も将来への道筋が見えたようだ。  
授業を通じて得た自信が、日本の、そして世界の未来を切り開く力として、さらに広がってほしい。